Japanese association of educational psychology

人 333

青少年の生活意識とマス・コミ

○山根 薫
長瀬邦三
荒崎正次郎
長塚和弥
（埼玉大学）

1 目的 近時、青少年の不良化問題は繁繁事となってきた。その傾向には憂慮すべきものがある。低年令化、集団化、凶悪化をその特徴としている。その原因は決して簡単ではない。それに応ずる対策も種々に論議されている。原因としてもっとも古くは C. Lombroso の素質論にはじまり、環境論へと議論は多い。不良化の原因となるべき多くの条件があろうが、それらのうち青少年をとり囲む今日の社会環境、とりわけ一部の悪質な風俗営業、有害興行、マス・コミがかれらの非行に大きい影響を及ぼしていることは否定できない。R. Sieverts も「不良映画やテレビが少年非行のなんらかの誘因になっている疑いは多分にある」と述べている。これまで日本においても田中正吾他など多くの研究がみられるが一般論としては、直接の関係は否定されているようにみえる。それにもかかわらず常識的には、非行とマス・コミとの深い関連性が信じられている。

われわれもまたこの問題解明のために一つの糸口をしたいと考え、あえてこの課題にとり組むことにした。

2 調査対象 埼玉県南に位置する公立学校二年生のうち、4中学校生徒1,678人、3高等学校生徒936人、合計2,614人で、男子1,252人、女子1,362人である。

3 調査のすすめ方

3・1 調査方法 質問紙法によった。質問紙と回答紙とは別にした。回答はすべて選択肢きまるアルファベットか、数字をかくだけである。

3・2 実施 調査校の協力により、ホーム・ルームの時間を使用した。性別を記入するだけで、すべて無記名である、研究のためであることを強調し、率直な記入を求めた。1964年11月から1965年1月にかけて実施した。

3・3 調査内容 マス・コミに対する接触状況と非行に関連する日常行動とに二大別され、前者はテレビと雑誌とをとりあげた。

3・3・1 調査の観点 テレビをとり上げるとき、視聴番組の内容を、視聴回数の多いものは何か（視聴）、自由にみられるとしたら何をみるか（志向）という二つに分類した。もし特定番組の視聴頻度が高い青年に、非行的行動が多いとすれば、テレビが非行の原因としてなんらかの役割を果していると推測されよう。また何がみたいかの志向と実際視聴との間にずれがあるとすれば、ここにも問題があろう。

3・3・2 雑誌 不良雑誌として埼玉県青少年愛護条例によって、これまで指定された回数の多いもの5冊、ひらに青少年によまれることの多い雑誌4冊、計9冊について「いつも読んでいる」「時々よんでいる」「ぜんぜん読まない」のどれかに格づけさせた。

3・3・3 生活行動 青少年の非行、または非行に関連するような反社会的不適応行動を主として調査せんとするもので、いわば潜在非行について知ろうとする。全部で20種類の行動について (1) 経験の有無 (2) してもよいかどうかの価値判断 (3) 回答者と同性、同年令のものの中に経験がいるし思うかどうかを問うた。

4 調査結果

4・1 テレビ視聴 10項目あって、それぞれに4種類の番組が組み合わされている。全部で4の種類になる。それらは大まかに分けると教養番組と娯楽番組とである。

4・1・1 第一項目で「海外紹介」を33.3－45.2%にいたる割合で第一位に多くみているのが中学校女子群、高校男子群、同女子群である。中学校男子群だけが例外で、これは43.6%が「プロレス中継」をみている。特徴的なのは、中学女子が「プロレス中継」を第二位におき、しかも34.3%がこれをみている。また英会話は1.4－3.5%の程度にしか視聴されず、最下位であるということである。

4・1・2 「歌謡曲」がもっとも多い。36.8

NII-Electronic Library Service

Japanese association of educational psychology

－59.7％に達している。二位は中学男子「忍者もの」29.6％を例外として，他は「コメディもの」22.1－26.4％をあげる。最低は高校男子の「忍者もの」を除いて「科学番組」5.0－13.8％である。

4・1・3　「犯罪ドラマ」が圧倒的に多い。全4群が48.0－61.4％に及んでいる。男子よりも女子が，中学生よりも高校生がより多い。二位は「動物が主役になるドラマ」である。

4・1・4　「クイズもの」が37.7－47.6％で第一位，学校差はみられないが，女子が男子よりも多い。

4・1・5　「ヒット曲ショウ」を男子は35.1－42.5％で，「ホームドラマ」を女子は43.3－47.6％で第一位にし，第二位はそれぞれ逆にしている。「ボクシング」は中学女子（第四位）を除いて，他の3群は三位においている。11.2－18.2％の程度である。男子が女子よりも，より多く好んでいる。

4・1・6　「歌のコンクール」女子高校生の35％以外は，すべて「西部劇」を第一位にみている。二位以下は錯綜している。

4・1・7　第一位は，中学男子の「忍者もの」39.0％を除いて他は，「クイズ」をあげている。28.7－32.8％で多い。第二項目の質問でも「忍者もの」は29.6％であった。組み合わせでちがってくる。

4・1・8　ここで「犯罪ドラマ」が全群を通じて第一位にあげられている。29.7－45.2％で第三項目でも一位にあげられていたが，同様に％が高い。二位は「ドタバタ喜劇」をあげているが女子高校生だけがこれを最下位におき，二位は「恋愛ドラマ」をとっている。

4・1・9　「ゲラゲラ笑わせる番組」が46.7－52.4％で，すべての群で一位におかれている。次いで中学男女で「ピストルを撃ち合うドラマ」が，高校男女で「社会問題をとり上げた番組」が二位にされている。

4・1・10　すべてが「若い歌手の出てくる番組」をあげ，35.4－65.2％におよんでいる。二位は高校男女，中学女子の「いろいろの知識の得られる番組」中学男子は「格闘シーンの多い番組」である。最下位はどの群も「キッス・シーンの多い番組」で，2.9－13.1％である。

以上を通じていえるのは，中学男女，高校男女の4群において，ともにきわめて類似した傾向をもっていることである。各項目で組み合わせた番組は，もともと視聴者が等しいものを選んだわけではないから，特定番組に好みが集中しても不思議はない。それにしても中学2年生と高校2年生とでは，その発達段階からみて，興味や関心にかなりの差があっていいはずである。それが全4群で共通に一位になっている番組が6箇，中学女子と高校女子とではただ1箇を異にするのみである。

このような現象の原因となるのは何か。青少年の一般的傾向なのか，マス・コミの提供番組に他律的に支配されるからか，家族の総意のあらわれであるのか，そのいずれかであろう。ここにそれを断定するに足る根拠をもたない。それにしてもいわゆる「暴力番組」が10項目中にすべて含まれているが，それが第一位にえらばれる回数は，中学男子で5，女子で3，高校男子で4，女子で2である。この結果からみる限り，女子よりも男子，高校生よりも中学生が，より多くこれを好んでいることは確である。年少男子に多いという事実は注目に価しよう。

4・2　テレビ志向　何をみたいかを問えば，その答として全群に共通したのは「海外紹介」と「文化映画・記録映画」の二つだけである。もちろんどれかの2群の間に共通しているものは4－7箇さがぞえることができる。しかし全体を通じてみれば，性差あるいは年令差によって4群間に志向番組の相違がある。

「暴力番組」が第一位として志向されているのは，中学男子で3，女子で2，高校男子2，女子1となっている。ここでもまた女子よりも男子，高校生よりも中学生が，より多く求めている。教養番組については，中学男子3，女子2，高校男子6，女子7と高校生がより多くを求めている。しかしこれは教養番組の程度が，中学生にあわないためかもしれない。

4・3　テレビ視聴と志向傾向　この両者をくらべてみていえることは，志向に教養番組の多いことである。その原因はおそらく学年あるいは家庭の条件によるものと考えられる。

4・4　雑誌　いつもよんでいるのが「夫婦生活」1.7％，「実話雑誌」4.2％，「笑の泉」1.7％，「100万人のよる」1.8％であることは，愛護条例施行の努力からみて，驚くべき数字といわねばならない。

NII-Electronic Library Service